



門ル呂入  
號1298  
卷

12

外國地志

外國叢書

十一

外國紀事

大國公記

外國紀回



定西法師乃活

元和年中江府不定西云桑門在江七十有餘年  
 肌子本端乃原上素衣而忘其衣之有也  
 獲之牛乃荷而捉之由一若一様之乃其珠板ををり  
 外に是をきりて身は裸に物なし而して世にさす  
 らく江府にあり其教寺乃門ありて住持也  
 此定西帝に訪りて中をきりて問定西を善く乃  
 三公者とは其法沙りて其をきりて其のいひ  
 い甲しすい其をきりて其乃果に其をきりて曰く其



人等々々汗一糸ひんやりの文酒を流るるに汝らたおのりも  
不便とてしるるにれも家貧し畜積を何處やん  
いさうもす人き業あり其刀を先祖より持傳へき  
刀ありても其意と知す是と酒をさすすき  
いくれも七代傳へ何れも之出まふもやも父母乃  
とと別り之りすと先づれは其刀とゆく先  
世より石をへりし商人の知識人を頼り其の中を  
譲りけ刀を賣りて之と頼りれはあまのりや先  
おそれよ又せむま能きま助ありて物々行儀あり  
降りていひたれは相と能き仕合ふ此刀を譲れ  
ありたれは乃正志あり價百金買ひて之り

愛りしとてふおのり乃外乃より能き長くも  
と能きを頼りて打中をたれは甲斐く若き  
手取り價ひ百金とて其金を買はれ今も  
之れ乃百金をせりも難きもよれ京乃乃と能き  
元もとて中くも其刀をへりて其刀をかくも  
先石をへりて又母も其刀をへりて其刀を  
さすもいひて其刀をへりて其刀をへりて  
又母乃能きも限りありて其刀をへりて其刀を  
思ひて其刀をへりて其刀をへりて其刀を  
近固りれは薩州へ誠へりて其刀をへりて其刀を  
若き降りて其刀をへりて其刀をへりて其刀を

有り合はし暇ひあはれ、その人のいふやうかといふ年  
空はくらくら〜とわら〜と云ふとくふ志か〜と云ふと  
ゆふの乃依りけりければ相と許末すれへり  
人あり今所まを空とて馬は腰をそられ能乃  
すを成〜と〜又云は唯乃奉公を口惜〜ぬと思ひあ  
きれすあり〜又云は唯乃奉公を口惜〜ぬと思ひあ  
見ゆふ如くいす年すも〜ぬ方の親の側を  
中〜と這出され若れればゆの命〜と云ふは  
り難〜とすとす〜と急死落度〜あり〜若れ  
は〜家今中〜と云ふ海り、乃代れり〜、今を  
千世すもすを空とす空とす空と空と空と空と空と  
も

あつ〜と〜は合〜と〜陽朝す終は百々〜と千世すも  
必定なり又〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
す終り〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
空と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
あつ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
便所〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
新と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
薩摩乃鹿取乃事沙法名〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
慈悲深〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
今と年毎と吾行や〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
ものといひあり〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と











廿三日乃内取在庭々創后宮乃天く是けち后乃口く  
 しくく后のつれちるまはふとも日かの人よんせく  
 其を付さすれすと御ちき中を喰く堂へハ玉子七  
 活く堂へへさやあくさくハ御さくくくくくく  
 是二三里も帰れあしり又便道う市芝海之くく  
 味近さう玉子宮くく色乃茶のゆ既玉園皇(奉進)に  
 ゆう若くわくむ后乃つ旅くを智やくくくを茶をけ  
 させしものま命也又又上乃右后七活されきり急き茶  
 を付させしものうもんまく上殿すくくさうあうく日本  
 の世数果まくくといくあれて夏の世数果まきつれく  
 けくく留ま俗まき新しき世数果を右活へ出されたり

下取々芭蕉布中々飯子上々紋紗也 振棟七四季先日等の  
四五日のみく箱名とそす御紫束  
 を急習少を板しそくお袋を扱へ右さ後中急き茶を  
 御出し練合懐中しふゆま入るの操へたのく大き  
 けく右階を少くま二町所き員しく石を磨き身く  
 又石乃桐干しい活くの花方の紋を彫けし右乃あは  
 中后乃茶白石を磨きまきれしけりけり御殿まき  
 廊をけりまきゆりく玉子宮あかく入る良久  
 しくけりまき柱乃進風蒸しく川お吹りの言不の  
 まく玉子立出けひしそくくと堂お焼く入れハ玉簾の  
 中よ玉の持子を並后御さすまきを板ひけきり七輝く  
 ころり玉乃かんさくくをいさくさ敵乃さうまやらく

この節年の福を十ふふ又之にやうく左右侍七十八  
人有り之を善しきうさ那う居風の終りぬ揚去肥  
の如くは思ひこれ年節の如く一人一人居乃當を  
外一茶を付すす是乃大さ十さ那う乃子乃定福を  
是くさううちくさ居乃ッ安を終えんと切ひし  
申く様さわさうと思ひれす何茶を居茶を居  
是くすさく退さう御まよと建れく歸りしれ  
まよといふ所んあられけ茶をッ本後あれか  
家何ささよよされを御福を居何ありと  
宜ふ徳の御さよは是り居乃居乃中何の外は  
わさきかきさうさくを御湯を二口さ何さうさよ

かゝれ目ななる暇しと上下を収ひまよと告事なりん  
まよと御所何御さおあまの御神佛乃仕業さ  
是さそれなりさなるはさく何酒菓子今御能  
居ひにれささく事又又乃方ささく人方那く收ひ乃  
供何乃を日茶ささく居又一又何御事ささく  
上れぬれ日茶法わささかひ合ささくす又さハ  
まよと六ヶ茶中茶を練くまよささく御何さくまよ  
ささく茶法ささくさ日ささく遠ささくささく御  
かゝれさ魚御も何しと思ひは眼乃方ささくさ  
まよッ候ささくけ方彼乃乃振さ酒者さ御事ささく  
ささく何乃居乃居乃回ささくのさ何何ささく遠く





その所を以て之を月之と名を給へしとて家を後々以て  
居りて其日能侍女一人を仰り男女十人ありて其心  
磨くべき所の方のふまぬるまをかく名をいふ所を  
かゝる所とは名をいふ所 琉球の風いふ所 即ち  
物づかひはなかりに強く 居る人の氣を執する事  
中々くは強しとて名を一々して一日もたえずの意儀は  
かゝる所を明き男女を仰りて其をわかぬる乃其心を  
とん こと名をいふ物を浮きこい 舞 酒並てあり  
二日夜を明しぬ日本乃其格条の能く三平書記なり  
其格条と強く至乃湯ふとも仰りて是亦乃よま其心  
と強く云と乃其心を強ふとも仰りて其想像り 何れ

初て乃其乃月其まありしは福建へ乃其出るれとてま  
さうく磨あく海りぬ 此時甲州に在りて人て所廣  
を望みれば一人の心をも望み 風能能れ  
全夜八日仰りて 油陽とて 港よ 志すれし甲州をいふ  
そりもも乃とてぬ 大船数艘とて名をいふ所をいふ  
仰りて其と十日も仰り 佛道とて 即ち人仰りて 道三日  
人乃其くやうて 郷一 是を 青月名をいふ所をいふの仕  
遠國とて乃 使者の事なりと 即ち 志すれし 見れし 所を  
是し 其所は大河とて 志す所なりと 是を 志す所をいふ  
とて 志す所の家をいふは 臨み 仰りて 川 船の行とて 志す所を  
仰りて 志す所は 入れを 志す所の 家とて 丸柱をいふ 二階  
三階 仰りて 大伽藍乃とて 家 毎 大おとす 志す所を



きり所字部府乃西門所り於く郡府乃廣さ四む乃十  
里四方所るとよけ於る上り 帝乃遠接のこゝに  
すんしつれとをま子乃すす部といひつれを  
うゝゝ思ひく物れとて廣さ上りよゝ思ひやれ  
さう琉球人乃旅館もつりせれとを所とよし酒肴の意  
よもつりあしそ客舎乃さうもつれとよし所とよし  
つゝゝ館の目も合ぬとよしつゝゝ舞依つり又つゝゝ  
合此館乃旅物と館し家くもつれとよし夜更くこれ  
そ火のえしと書物とつれとよし書物とつれとよし  
凡そ書物とつれとよし  
此れ種々な書物  
つれとよし又家毎に書物とつれとよし書を讀む日むとよし  
他久とつれとよしつれとよしつれとよしつれとよしつれとよし

もも廻りかき部城乃門々大佛乃をそとえとれつりさく  
更奥へと人行かぬといふ所とつれとよしつれとよしつれとよし  
つれとよしつれとよしつれとよしつれとよしつれとよし  
志れつり物れとよしつれとよしつれとよしつれとよし  
所とつれとよしつれとよしつれとよしつれとよしつれとよし  
灯炮一つとつれとよしつれとよしつれとよしつれとよし  
つれとよしつれとよしつれとよしつれとよしつれとよし  
善信場乃石本を川本中りの中り本字を讀乃言する  
さういづれをいづれとよしつれとよしつれとよし  
飯神のよもつれとよしつれとよしつれとよしつれとよし  
つれとよしつれとよしつれとよしつれとよしつれとよし

お高より一々紗綾編緋袴の袴は日中乃本海  
麻布乃價より安く部は長形より凡五十日とあり  
お一々汝陽子帰朝之途に宇治山といふ山あり  
日中乃比叡山乃如し其山は皆桑乃本形あり一いつ  
深きや知れず寺あり出家の僧と禪僧あり  
一々福建乃桑乃名ありとて一いつ一いつ日本一いつ  
桑乃名所を宇治といひとありいふ一いつ一いつ  
汝陽子よりかれこれ乃より其は是の船を出せし  
帰るといふ天氣一いつ一いつ風も十分一いつ一いつ  
琉球より帰り其船の物を日中町へ配付し  
其れを利をゆくはつとあり一いつ一いつ

より乃高い船より傳へ法眼乃流へて流るる能は會  
阿知きくはしを委しついつ一いつ唐物ともかき乃ゆく送り  
父母のまへも思ふ路一いつ一いつ一いつ一いつ一いつ  
一いつ一いつ一いつ一いつ一いつ一いつ一いつ一いつ一いつ  
より乃より乃ゆゑ女子一人を儲けり琉球は女天女の  
急ありし一いつ男子より女子を好む一いつ一いつ一いつ一いつ  
社を徳西八良為朝を祀ひ初り今も八郎 山曹子乃  
らし夫社乃中より一いつ一いつ一いつ一いつ一いつ一いつ一いつ  
をより乃より乃女天乃神初に巫女ありこれ一いつ一いつ  
一いつ一いつ一いつ一いつ一いつ一いつ一いつ一いつ一いつ  
益せしとあり一いつ一いつ一いつ一いつ一いつ一いつ一いつ一いつ

ふしおはくく城く行末乃やをかむかんとす  
初き乃し記号と御し上を帰朝しく親をもあ  
かむいゝて只甲斐とゆれその連此心乃人との  
心しと備せし事なれいひ出さむとて由りゆれ  
身中よりゆれすとありしは其の事と出さむと  
年しゆれ年と二年目なれハ琉球よりり川の如く  
薩摩へ使者初海よりハ法眼へゆれは帰朝後す  
甲しは任職れあるやとすハ法眼といひて其ハ  
その是よりハ二三年も待たし能町が工能くはせ  
いいとこしきりも年湯建へぬい候むとて信へ  
むとすはいけりてなと魚と集りて琉球の人と曰ふ

御りて思ふ事々々高い物買りの帰れり後の作とい  
ゆれとすは日登りなり初又三年目と事なれと  
如く薩摩へ使者船乃散帆するゆれハ法眼の歸  
一夜ハ親亦よ遊せし事なれしとすさす  
歌きさしゆれハ法眼は使となり今くヤトカソノ  
子父母も生乃内そに面を遊なり歌きゆれ  
いとまほしん歌くゆれしとすを借さむと  
三日右王子も所江帰朝を免しゆれハ法眼  
ゆれゆれとて又その年薩摩より船乃  
便し法眼よりいひ候れしとカソノ父子の事  
思ひさすなりし事なれ母形ゆれの位家しゆれ





何れも其の天子のからしめられ、むかしの御治しと伝へり  
外乃よりありし天子の病はわらう。後府より出立ひきかれ、  
清足守より葬りしより、石塔を御守し、又院殿の  
うをまし、は後々後摩の軍勢押寄せ、降すまひ  
福の明く先多ひぬ。先達の娘とされ、母も其息と  
ありし流り、皆旧を流し、神を候う。ありし後、石見も、  
威勢は法く甲州と取候し、後々の金山を代官に、九日不  
石の惣代官と、不々如く、任令の出行し、女房百人を、  
興し、是に是し、是に人吏と百姓、深也、常花より、可志高  
と、征し、終乃、死する人命と、截り、憐れ、は心と、いかに、  
ふし、け人、生れ、を、あら、は、精、示、あり、し、い、は、奉、天、道、也、三、

石と、ころ、流、り、し、石見、も、あ、れ、と、候、想、り、取、扱、也、  
後、向、ま、ま、の、御、治、し、の、御、料、の、御、と、い、う、御、治、り、し、  
丁、れ、の、責、め、を、い、ふ、し、も、せ、り、刑、罰、を、受、ひ、く、御、と、れ、し、と、ま、さ、  
其、嫡、子、を、十、中、二、男、外、紀、之、春、能、所、く、と、御、と、れ、  
皆、首、を、削、り、し、り、多、れ、く、多、れ、し、り、よ、の、一、人、は、於、  
之、向、向、り、し、後、河、へ、引、被、拷、問、は、及、り、し、り、  
中、上、水、根、故、實、康、也、御、と、り、し、り、と、ま、れ、し、り、  
御、心、へ、し、り、し、り、御、家、守、へ、入、り、し、り、  
三、三、三、三、乃、常、花、今、日、乃、御、と、り、し、り、  
思、ひ、知、り、し、り、し、り、一、年、を、終、り、し、り、  
御、と、り、し、り、し、り、し、り、御、心、の、御、と、り、し、り、  
御、と、り、し、り、し、り、し、り、御、心、の、御、と、り、し、り、

きしれものみ統とおぼしきすやと作しんし  
あしよに花をきりしよきまきりて出家の意をきり  
此徳の事ありとくむく既に剃髪しりり刀根衣  
預めのをししを布袷をかき一糸下人上人のしよき  
本流乃かしりしをぬき又糸織を親教にきり  
ぬき再び糸を尋ねりぬきゆへにすといひ合  
ひえおし帰し冥土よきまお儀の月白きりぬき  
まししは袖をぬきま念ふしりりあり具義上人乃  
勤に修業しおの念佛を唱えれば念ふしし法りし内  
ほお乃種を治しりれハ早よきぬきしし帰るぬ  
彼法ゆをぬききりりの上俗名を尋ししゆの志し

中むむいし苗字を忘れしりしゆりり物ゆと  
あしりり史年をぬきし流ハ廿五年乃星霜を替り  
あしりれとせよ掃形形すりぬきハ彼法ゆ、  
ゆきりりすあしは法をきりあ統と今とせ世乃いし  
法りしりりしり新まよるゆふあしきりりりり  
ゆきよきんしりむ乃乃の物忘れかきしりりりり  
りりしと書きしりり

おしよに云定西の山本元和年中七十の全山より十一年  
の年在兄を出立へせり又あし立居り安座  
外に再あへ帰り父母はあしをきり後摩へ行し  
大正年中とゆりしあし元和年中の元七十四歳と見え

年を以て推し、天正十九年庚戌の生れ、  
廿歳の年ハ永禄十二年己卯、天正を以て、  
又元和九年乃以七十歳と云ふ年を算ふれば、  
天正廿三年甲寅の生れ、廿七歳、  
改元あり、癸酉の生れ、廿一歳、  
改元あり、九年、  
廿九歳の生れ、天正十年也又

神祖乃伊代志海、  
の生れ、  
寛政八年癸卯  
の生れ、  
寛政十四年  
己酉、  
定西、  
十六歳、  
乃以て、  
其の、  
十六年

庚戌の生れ、  
江戸へ来れり、  
知ハ大坂、  
帰朝、  
其の、  
と推し、  
皇ひ、  
神祖、  
南部、  
古史、  
多く



もの思ふぬ事あり又是と欲くしとすこと往を  
きくゝ飛徒と喊し飛入乃鼓と増より物をおし討す  
何れはを昔し人七多くと持れず人とおき流に  
合戦し猶よりありす孰もく人とも合戦をともなく  
持中りぬる工更を何すまきと作れいふひと本  
しよを能れ日左飛を又馬山を飛く家よりす味相  
の上を工物くり上なる何りけり此礎を造しりぬれ  
着飛先よりといひ世也といふ大飛りけり  
山をありくハハ上飛しといひ何くして連飛り山前へ  
去る飛り中を山麓に入りぬれいさくハ政と名をよの上を  
何り川を飛り大飛をいひ出ぬハ此何りぬれハ世より

しは中出し難くといふや故へといふと上を  
何りぬれハ大飛り上飛りハ唯おの上をの  
ぬく急限を多く持へ人を多く持しりぬれ  
内領正乃百世より名を有りて流道の上を飛りて  
乃針の飛入乃降すありといふ何りくハ名氏乃名  
大方ありす依りぬる工更政をいふ内領正の内領  
山くを尋すなりぬる名指相候にありぬる  
ありといふハ何れなりぬる名指にありぬる  
其國乃澄ひともあり中飛しといふ何れハ名氏  
ぬれといふハ此の所地を止る今流乃まけり  
ふいぬりといふ何り希れハ大飛り名氏といふ

己の業々中より儀り 法由より令塚正を多く嘆ひ  
泉元伴受乃由山入し 己分乃令塚を塚出し  
是を江戸へ納むれハ所棲煙 斜りあり 大飛を  
大久保石見よりあまれ 武飛玉ハ王寺よりあまれ 兼地を  
仰りこれハ境山ノ石を権ノ家辰を建てるなり  
后任し令塚山ノ石を所掘小舟の石をより多く抱へ  
海より要兵乃山ノハ子よりあまれ 佐海へ海令山の  
子をとり神の福ハ其所流すありしハ後を社のみ多く  
其えをよれ 幸なり 権の石乃石見を所置てむし  
江後人へ福ハ所置を流すを身一世ハ別家ありしハ  
死なむむ 云哉を標々令塚と會りしハ又世乃石見

つりく氏を若しの令塚ことを取明く 報り 権  
取れ子儀二人あり 由由波ト懸ひしハこれハ石見あり  
後河より由由波よりありしハ由由波ト懸ひしハこれハ石見あり  
是而石見の石乃石の多れハ故由由波の石見ありしハ  
さう多し由由波をよむしハ由由波ト懸ひしハこれハ石見あり  
以故にこれハ由由波を見ハ定西よりいしハ由由波の石見あり  
かゆりんか

誠お心三志新保外乃由子ハ難親由ハ漂流ハ由由波ト懸ひしハ

誠お心三志浦外保外竹内度由妻ハ同度由ハ二時岡田



上料理湯を又と是と取換也此より上は  
相承寺より中へは物深山より下へ  
物々多分より取ありと信故きく  
まはゆへ一行を高ひのありん  
人冬乃を所をなしくませ  
まは是を無くましくといひし  
耳り幸内下等しと語乃啼  
彼三人のより取ありき酒  
とゆへし四十四人のあり  
刀根差を海上より船風  
と取く丸船より取ありし  
と取く丸船より取ありし

ふれハかた所上人冬乃  
と一也一由りゆへしと取  
不審とれましくしと取  
取く四十四人を射殺す  
刀根差を海上より取あり  
取くハ方へと取ありしと  
十三人のものれを言ふ  
し、れめ被しと取捕りし  
二百人より乃人殺と思  
九千人より乃人殺と思  
と取捕り船子のものを取

船長岡田云々馬つと船中くくの危険をなれせ延び又竹田  
右花々子履兵十四並工舟小童の舟を多た顔玉玉  
船へ焼杭を投こし取所へ舟入浮ぬ伏せぬせしをこ  
射殺さむしちを撞し多し船をく酒合をさし  
りの内二人をうり助け揚げ二人ともほひぬさく  
捕らへし十三人のもの一舟に修をなは一人つり分へ  
ま行國乃ををぬきせりしとほひしは所より日海  
をゆれ取し居候するしをさしはなをさし取し取を  
吐息の中じんきりさよといひと隔りしりさ後十日なり  
さく又彼士うり三人をの甲一船をぬ人とも十人を取す  
其所のものを吟味しし船をさしと日海をさしとさの

三人と家し十五人のもの一回馬を乗せゆふと  
船すす回すれハ取らゆれハ行しよ二十五日ゆり日海を  
建備し取し居候するしをさし  
船はさしよとてと  
船の都々とて所の奉り而  
いりさ可くはれ行しといふ事りのをほれ取しとや  
う小書の子よふとくしゆ彼木の三人のものをなれ種  
りせんさこの外なれそ取くは身よまかきしまはく  
取しととと虫さん種し乃は取物よ似とぬ取ゆり  
さ取子合ふゆせしとせ地く盗りある海せしなれといの  
よし思ひびとと盗のあり船を乗せしとと取しと大  
船は多しと流されと彼地へ去船せしと北國の人と取いれ  
山へ入る所のものるふと勝射殺され又船を焼れ道具を乗し

其々云々... 正徳元年甲申... 慶和... 清和... 此... とぬられ南京の公...

其々云々... 正徳元年甲申... 慶和... 清和... 此... とぬられ南京の公...

一書云々... 外... の...

一... 夫... 一... 又...

一書ヲヘニサツとニニサツと  
札又ニサツの能ハ招カレ  
酒食の養應ナル程を所  
中ウラ花ハ國田者存ツテ  
財トハ即此ハ花ハ而日  
子ウラ一マテ與ユ入ユ

之既鮮ナク送ラセテノト申付ルルノ事  
リナリシウ酒肴を納メ又之を定メ三人馬投  
十五疋を賣り送リ事リ之馬は赤ニ又ク多ク  
伊ハ俾給ノ事申御され申ナク之を賣リ  
五匹乃籠乃録申ナク其籠二本白ニ小籠ハ赤  
小籠一本ハ赤ニ本籠申ナク其籠ハ赤ニ人  
百人牛ニテ送リ十二月九日ハ朝鮮乃玉界  
同ナリハ既鮮ハ部へ送リ申ナク酒食ハ既  
納メ其籠乃外を賣レぬル事申ナク  
正月七日ハ既鮮を去リ既籠乃道を行リ  
以テ大馬ニ酒肴命多量粉水と申ナク  
其籠乃外を賣レぬル事申ナク

難艱ハ車ニモモ  
風ハシラ

此云云  
保二年乙酉年

タウ子ニキト 不取ノ事ハ申所ノ地  
酒食ハ乃ク納メ申ナク其籠乃外を賣レ  
夫ナリ宗馬チ其ノ家長長川伊者  
一難艱ハ車ニモモ 風ハシラ  
三月十七日ハ宗馬乃既籠ハ赤ニ  
四月十六日ハ既鮮を去リ申ナク  
夫ナリ宗馬チ其ノ家長長川伊者  
一難艱ハ車ニモモ 風ハシラ  
其國乃人丈ハ本邦乃人ナリ  
其籠乃外を賣レぬル事申ナク

て一ア一に刺す事一也を髪の色を赤中より二一  
分ちた者より引く川中一油を乃かく一を先と  
帯より留めたり

一衣類を裾廣くしと袖をいへて細く子の甲より  
のりしは三より五へはより長袖と裾幅よりありハ  
りれこと縫は之を一板あり

一冠りものを丸ハ藤紗の如き中を丸く縫うと破りし物あり 後物と  
別の物  
此小玉をハトコとよばしと縁を元取  
氣高くとけはむく價ひ高きなり 上より紅乃房を月をとり  
金銀乃玉を中を端とすなり 此小玉を成  
の別物なり 帯を袴乃如きものを組と  
思を冠れ房と玉乃端とをの冠りのと同一

一鞆鞆乃却を日本道二里四方迄と所長一其内日本邦の

城根一乃如くあり所長 本邦の城なり  
無様なり 是則國主乃所長と

又内乃殿舎を大抵本邦乃寺乃如くいふと殿舎上建  
はるね丸柱より一尾を飾き殿舎をを帯より二と乃

定りけり又帯乃尾をより帯より所長なり一は床板と  
よりのをねくしね切石より交差しより町家と本邦の如く

送り物とす尾着より一はより丈夫より之ぬ 送り物  
より八條より

一國王乃ツ名をテウテこと稱し一は年ハ歳より帯より和菓と  
かえしよりその事あり

一書云アリスをツムと之へ一臣下をキウアンスハトコロアンスニイアンスホウアンス此四人乃  
り  
一書云キウアンスをツムと之へ  
一書を思へ一は外より世に乃臣下物類より改めハ八人より  
執りハキウアンスを國王乃伯父より上下より思れ





所をすれし曰く乃分列する言を以理非を書けり  
アセスル虫すアセス是を整然し其詮海下れあり  
依此をわき乃くわしひたふきか又たり言遠乃り  
あきつて能くれし其夫亦のす何れ何れを言ひ人  
之海を保てし事とを 此等てし經定場七而れく一而りありを  
るし海を保てし事とをアセスる言を以理非とす  
一死刑に行ふ罪人以此阿をアセス乃人く強く其れを  
詮海し夫より固く是を其れを固く帝王に固く捧  
あを取れし死に在りきこの固く其れを是死にあり  
これをも死に死刑に次るものれを海に梅り又死刑  
く其れを死に死刑に次るものれを海に梅り又死刑  
稀ありし又他邦よりけあたり罪を犯すものれ

とも三年まゝに罪せり夫より其れを死人乃て死に刑を  
交れりし これと三年の内に  
不法を犯すものれ

一其勝 亦下れし刀を帯せり 其に一尺五寸あり二尺半の  
大銀の板本物を徳に提れり大方を鞭指し  
未細りし小鹿を法海をも入れしは其れを以て  
本を伐りしとてなり

一大名ともよへし人乃出行乃町を去りし乃旅津抄也  
一武術をわたりし人なり 度弓としてか邦へ  
渡りて其のわたり  
毎日村落地帯古ゆり馬をわたりし其れを殺ししを以て  
りし中一又けり其れを馬上乃人より取れり

脩練しやすし

ハ世を之物とシシカ  
目より高く之を云

一具足の本邦乃之ぬかをむくの如くは流を極へ送  
るもふく進むるの也

一馬工勝 駭多自由自在まじく申しく申度き申ふし

家くも馬は安れずを名なされを馬は安しし  
馬の信を言ふと之は安く安れしす人をして  
及下駭時を一字に強出し止れ所を細を敵に  
其値より駭の内いくも重なる安れずまじく  
駭一切無くと安しりなく安れずも息切れと  
しあすふしまぬを難組乃人の馬まじく山坂  
進出り駭しりまじく安れずも安しり水も

一書工アトトイトトホ  
名の芽へ坊れし時馬  
語ると云ふと

吞やすされともれのしりぬ中すまじりす又  
休す下れ何と云ふか得ぬと何と云ふか  
何を細くし訓えくられし安く安れずまじり  
安すれしりまじり

一軍法を先より書籍をく或は下りしり書  
巻御合存すれずとも又或は書を讀ませ  
りしりみり居積り人何れを遠縁を深ま  
るを居るとくれを誠し先能く其書を讀  
軍兵士令をすししと流傳りて又或は  
軍法のみを公を致し又戰場を討死す  
男女を焼くといふの子供に物とし  
名を安す人

江死すれど之も子使く且去を許んれ手を負し  
申のま今治を仰り又佐病をく血走らしめ  
罷り行しれ高子國所より上人の右仕奴僕より  
行れしより取上下大哉傷を中より前を捨く切を  
をぬむしとす  
永く難観く行しぬを大明と  
合戦をいひしは是のまをいひ

一大名ともいふ人を知りし十人亦人の下人を供ふ人を見し  
るし人より他法親と子の睦みの故より之れを  
甲子より妻と娶りて女子より夫を娶り夫婦と  
此の風俗のよりあり

一此の乃人より夫勝むかたれくききき少く痛ます極と  
肌毛のふし高節の入り服を悉く上より毛の方を裏す表より

仙後純子且外ゆきし 佐指乃織物を作り服を悉く  
大名ともいふ人よりことと不崩之の故より  
毛の故は乃及ふしを用かれやしと  
一車行ともいふ人より其の言葉とす  
日中を至理深く或過乃を厚く慈悲り  
所あり難観も又如く乃を  
いしれ

一難観より得る中より清ひ人をけりし  
此のまを平をせせされや上下大業  
粟の飯を常食とす

一言料理の仕方  
然由より水  
湯をいれ  
味ひよ  
口く

一書云龍祖の部トイ  
カラスの疑跡山跡ト  
阿比と云地跡トイト通  
幅モ七八尺モイハクハ  
カラス又ハ川トカレモモ  
御一の大川トカハカラス  
十坪リノ川トイ足ノ板橋  
ト堅クテ中節ニハ太クモ  
モハ一人ノ床モ多クモ  
ハシ又龍祖トイハ中ノ川  
幅ハ四十尺トイテハ中ノ  
川トイキハ中ノ川トイ

一龍祖也一河一初を詳述する所ありしは故地高似を  
少ひたりを奇せしる事しさすも印々とを勿りかぬ  
石自也取らしむほよとアハレ信玉乃之業も是へ又家  
云業も取玉乃人学とり信玉も勿りし中子ありし  
無女也一守地五三節と龍祖の詳も京乃詳も自由も出来ハ  
清潤りの所勿りかぬし事モありし  
一龍祖と唐との界も尾の如く厚さ三四寸とて之を炭主  
とすも是ハ石灰主といくも古く見ゆれ之能業を  
相道取らるるに換て是能取らるる之と云々先食之也  
石火取十挺を仕懸しあり

一書云和泉龍祖より  
少ハ中ノ川トイハクハ  
カラス又ハ川トカレモモ  
御一の大川トカハカラス  
十坪リノ川トイ足ノ板橋  
ト堅クテ中節ニハ太クモ  
モハ一人ノ床モ多クモ  
ハシ又龍祖トイハ中ノ川  
幅ハ四十尺トイテハ中ノ  
川トイキハ中ノ川トイ

一和泉を方六里取りし所す中ノ川宮あり中ノ川四方節  
塘を以し四方ノ橋門も大橋と云へり門も大いなる石橋  
五つを並へて外ノ門と云石橋三つを並へ架せし川れし  
桐干の龍乃彫物アリ 大石の所ハ正徳二年(一六三〇)所ノ橋を造す事ナ  
ハシマ正徳二年(一六三〇)外ノ門ニ入ルル所ノ橋も又人ハ合  
是所自在ありし依り石橋の教年平の二橋ハ 中内へ入るる見されし也  
橋石を以て築之と云く外ハ友人ノ所宅外外門ハ  
磨石を以て築之也と云く長屋乃め家地所内々本邦の  
寺乃めく丸橋の家地も床板といふものを以て  
磨石を以て築之也と云く是乃の菓を由り映を以て  
深くも是所家地も細く是等しく高ひを以て家  
く乃派いふも有りあり

一 小京を以て及ては南京より難題乃女子入一所々  
此の乞を中よか一物一を以て判る一物一難題乃  
凡俗之換へ一物一を以て換へ唐國の人々難題と  
自供其邊より正し可く虚法多く一益減多し  
以れり一物一

一 唐心々米價ふくく白米を以物を交易す故よりハ  
亦く一石の米を以て銀子一両を以白米一斗は換り

近年大明と合戦中あり  
此の米の價を以て高り

一文字を唐心口取し難題へ七返りたり

一 小京より南京へ行は急まのり多く行内を三十日と町ハ  
一 此れより一は道遠は大河を以れり一南京を以て難題へ

改取河より軍路小京へ隔陣と一文の軍路は南京と  
あり一所を以て獲すとあり又は南京降参の一人  
小京へ降参は参りしを以て一紙を判り難題を以  
唐國の人とは是こより

一 正月の祝ひは小邦はかきす内相好し之三日を以  
祝ひ字は進ましく祝祭あり多傳へ年賀は出仕乃  
人々は小邦乃將取此乃物と云ふ是し其人好し  
騎参よりくはは又八月十五日を祝ふ也何れも  
是し一は是ありありと是三月九月の祝ひ口々  
是ハ十月の中より四十五日目迄乃明帝は是  
一 唐心難題乃寺く多くありつれ乃寺も佛乃あり

師... 一万... 乃...  
 夫... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃...

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十  
 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十  
 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十  
 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十  
 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

大... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃...

純文と積まぬく... 念佛を南無キ...  
 一 乃... 朝鮮... 乃...  
 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃...

乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃...

以凱流の比六國田書多  
 字地手印は人形其の  
 概細の第一等れ尋向  
 一書多し一書のみ  
 記一書その暇志書  
 一書は義徳のゆ  
 然る難一凱流一人名  
 又一所と白石先生と証

堆く蓋又一倍より既勝氏多し乃菓子類六七十五種  
 重ぬ出され豊敷通りとなす其倍を川之流へ又三  
 四方をの倍一人お二倍をを出され版の外一菓多  
 羊ホ乃肉丸五六十子とんかく何れも夜長酒  
 其れ一ツ帯一節松本綿給本綿一友書一提筆五  
 本或五倍の倍くは倍より  
 一八三二サツと中大名乃如く本人より酒者と恵れ  
 多葉粉五斤の倍くは倍よりぬ  
 一トウ子こきとよ所乃地流より人より酒合乃り  
 一帛二倍半柄十五連米五俵千膳二百枚酒味噌等と恵れ  
 一宗家の役人乾鮮の日本銀一法一古川伊在書より

酒一駟 推草一斤 烏城百枚 命五十束 合米糖十斤 烟炭  
 廿本 煙草三十箱とあるなり

尾張國古井外原左馬、持原乃松長次郎し出  
 あり子等十四人天皇と近江バタニとよ書一凱流  
 一より 帰朝一凱流

尾張國智多郡大野外原左馬、物部乃松長次郎し出  
 十四人未組寛文八年九月九日 松本を續く江戸へ海  
 海一同年十月末品川乃沖を船出し一伊豆小田の傍  
 船を泊上月十四日 宿を船出せし時既十五日も  
 三ゆも所濱乃内大山より一二里海沖へ走りし中西乃風

その二書と國守ゆ  
 松本十所松田松長と  
 了り









帰し是より仕立しと見えたるは、二百石の  
尾を積りて、川舟に供せし勤まは  
はくは日お帰しをすしと仕立しと見えたるは、  
立歸りしをを彫せしは、能くを治りしと  
二人三人で夜後しと仕立しと見えたるは、  
かく供れしをすしと仕立しと見えたるは、  
去れ月と乃足くされは、敵くと見えたるは、  
ふりしや、思ひしや、さまたけしは、是は、  
ししと見えたるは、所へ行り、見えたるは、  
しと見えたるは、あまを、神の御来し、  
しと見えたるは、しむのや、しと見えたるは、  
かく

舟を出しせし、二十日午、さし、戻り、ぬれ、  
ん、ん、ん、ん、ん、ん、三月の、未、未、未、  
か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、  
圃へ行しと見えたるは、しと見えたるは、  
み、み、み、み、み、み、み、み、み、み、  
は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、  
年、年、年、年、年、年、年、年、年、年、  
さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、  
一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、  
御、御、御、御、御、御、御、御、御、御、  
六



等しはし所より船を造りハミ所のものたるを令根相  
造を多く此所乃々のもたらんより一舟七かし又その  
多ゆひり山工所本を令此舟工候す危しと一川船  
船を造り甲乙と稱り 令の舟を巧みりらと稱しと云工  
よりと船くは更なるう十二月より山工入る曲りき本  
の所へを曲りありの本を撰弄しと板のぬくよとて割り  
又用之せしと大船作長を船れものには本を伏し山工  
伏例せし本工願され 船骨と徳を造く折れ三十四日  
船に候れく音船せしとてさうとみしゆとせんよとて  
ふく此舟は船りく終り死し是よりけ長吉未終りて  
ハタシ急乃このよいひしと果し是は怪家しく死れと迫りぬ

二 凡そ島人の多く合ひし船り一舟と云れ發し也す四かへ  
帰り多を令根多の舟の多く再ひつ海と云へと云は  
いよく候まゆしと思ひいよき死しとて明とて思ふ志の海より今も忘れし又成の二月に候り船七  
大なる出あり  
船は造りし本ハ三ツ本と云ふ本あり大なる舟より大なる船  
柄をいれ本と云ふ本と云ふ又割りしと云ふれり船七  
入舟の四つとて造えり又船乃七と云ふ舟ありけしと云ふありれハ本の本と  
つと令行し舟の穴を云ふと云ふ舟ありし船より板より行とつと夫と船のた  
つと云ふ  
穴を穿ちしと

一 船大抵出馬り此舟田外高船形ありいづれ口は舟日本  
より上より大工と撰りまく乃道具工所種を云ひ船板より  
包む 船板本より造り船より舟より舟れを 船百里川の江戸  
邊いよかり乃風より神も積りしれを破船し死すしれ

沙々 唯うり多れを以て善人といひ又道具の如く存一堤と  
 程く仕立行後を打す業の本を以て今行する本は法を利き  
 僅とし夫を以てかき多く小船を以て云々乃を以て有り  
 幾百里とも知れぬ大伴を海に日あへ即ち此言や可成  
 危き事といひ命危きは流る一命を以て去り多れの内  
 の事之れと思ひ切り多れ更なる一命を以て去り百年を  
 生延べれともし明か人間の道を知れぬ島を巧果人の  
 口惜し道も如流れ海乃底乃際之れと申すと十二人句を  
 一舟より船を出し神佛の加護よりと日あへ帰る親妻  
 子之方より色ひ多きを以て杖を以て明かて去り去りて  
 ことかくよ回船主人といふと水川せすを以て去り津隠

左二書と着る子之神形ハ  
 佐島の婦と座しを主人と  
 ありしものとも一はく思  
 れて何れと云ふと記号

多しとも危き儀かき者の船よ余海底に沈むより此島  
 ありてのひんりや語り多れともすりんすはよすを理せ  
 船く是行回船主人といふ人のものいひ合へしにゆたう深く  
 流れくを而とも知れんれをゆとらんえんえんえんえんえん  
 一切船も御去りれハ三月廿四日主人乃のありて打船と  
 渡りし甲州の地を以てあまうありたりや東に流るやと天恵と  
 神霊を頼ひしにわ乃方よし神霊ありては船去ハ四月  
 中旬に宜小下句に宜小と神霊を頼ひしに中旬よし神霊  
 を以てわ一帰れに月を以て左のよしを船にのみ有り

左一書と着る子之神形ハ  
 佐島の婦と座しを主人と  
 ありしものとも一はく思  
 れて何れと云ふと記号

一水桶大木板八つありす水を入一舟に流く十 是れ甲州乃流多し  
 一椰子の実板五十五 是れ甲州乃流多し 一個草十斤程







早々三藩曆と世縁又と世縁一七歳く渡河しより日如を  
定より東の方より高り告縁へは所縁百八十里をよりと心  
穿く故足念はる縁のくれたのありと思ぬ

一 汁かき

一 刺刀 一 挺

一 袂 一 挺

一 竹の子漬かき

一 玉串二升 瓶

一 片膚淨中 歌くをえ物とて尋り一 南京人 踊り又日よ  
所へ六市人乃之少や縁く一と仕放り一と見え一 史更更せり  
又反のありと縁りきり

一 湯 一

一 米三升 斗

一 本縁衣類 十

一 塩菓かき

一 片所々寺院多し歌くも二ニ寺許くえし一 日本のかん  
如くも遠居上々凡昔より一 座板を流す石取ハんを  
おまへへ伸儀も日本と同一一 新伽大日土の本縁へ令  
節を主又日本乃を急めく玉地多く入るる一 是は縁依  
すれつと見えつり一 是れ少々の垢子松の樹もとも日本  
より一 多も形々寺院乃回くまは農家の縁り人の作ハ  
此のま中よはく毛をぬき一 毛を三つ細く一 と縁へり  
一 是れとのらつす制り尚袖牡丹をの衣類を急きむかき  
は髪り刺さり一 難艱とよむより改たれ縁の如く乃  
は髪りあり一 と穿へぬも日本乃申牛と二つ合せり如く  
大よ是く一 かつ縁前子先子をわ人より少く一人乃船に

船長よりゆきゆきと船くたきと申すも、或る國の如く  
 早く船へ揚りて日船と侍人としてここにいらは、船屋の  
 あり五月廿八日は、天守船の吹浪多れは、船長を  
 船中へ参りて、付港へ参りて、船中より、口定と月日か、追ぬれば、去年  
 十月、月舟りしハ、タシ、古船を、ハ、より、  
 又大十を、土陽月、日、果、一、日、敷、日、南、船、を、り、船、を、り、せ、り、  
又、日、七、一、日、の、通、ひ、は、り、ぬ、南、東、人、舟、船、を、り、さ、り、は、り、し、と、申、す、  
 六月三日は、船中の、おま、あ、ま、船、一、を、り、ち、り、ち、り、ハ、主、を、り、  
 一、役人、中、十、早、の、船、を、り、是、を、日本、の、お、ま、あ、ま、油、を、  
 け、必、乃、船、ち、り、や、と、申、す、れ、一、也、船、く、た、危、張、の、お、ま、あ、村、の  
 ち、の、多、れ、大、凡、吹、浪、多、れ、云、を、り、ハ、タ、と、り、は、船、一、也、  
 と、こ、ち、を、揚、り、て、一、を、り、は、り、を、り、一、也、何、彼、役人  
 船、中、に、居、ひ、來、船、一、と、い、ふ、乃、は、船、一、連、行、に、張、布、船、一、

若一と云ふ、二所より、何の役人、來、れ、船、中、に、居、を、書、り、  
 船、中、乃、通、具、を、ゆ、り、ん、若、船、番、人、を、ゆ、り、ん、を、は、十四、五、里、  
 何、ゆ、り、ん、船、中、に、居、行、り、を、り、返、来、り、一、也、  
 一、斗、七、升、之、斗、六、升、入、り、に、一、一、米、四、俵、船、一、斗、味、噌、一、斗、  
 新、四、五、把、船、奥、廿、二、り、五、島、家、を、ゆ、り、ち、り、ち、り、  
 廿、四、日、り、一、一、と、長、船、へ、送、り、船、中、に、居、り、二、艘、の、船、  
 役人、一、人、を、ち、り、ん、船、中、の、二、人、と、人、質、と、一、と、船、  
 一、を、り、ん、定、又、十、三、年、庚、戌、六、月、廿、四、日、た、の、名、前、を、長、船、  
 の、奉、行、所、へ、川、渡、され、り、

尾張市知事那西村長左衛門  
 目 草本村三 尾

日

大野村 兵三郎

日村 三九郎

日村 長三郎

日

大草村 八尾

日 六尾

日 兵吉

日 七尾

日 信太郎

日 六右衛門

メ十一人

外

ハタニ 船主 年寄 舟下  
三ノ子 船主 船長

日

中野村 船長

ハタニ 舟下 船長

日

大野村 船長

ハタニ 舟下 船長

日

中野村 船長

ハタニ 舟下 船長

日

大野村 船長

物より所より江戸出船より三ノ子 暴風より船中

深い流れ 天竺をよきハタニと 舟長 漂流 舟所より

舟物を奪われ 船を打碎られ 奴僕と舟より 舟長

舟師と舟子 舟師 舟師の舟より 舟師と舟長

舟師と舟子 舟師 舟師の舟より 舟師と舟長

舟師と舟子 舟師 舟師の舟より 舟師と舟長

舟師と舟子 舟師 舟師の舟より 舟師と舟長

其の事やれん一く口書とありん船中の如く悉く  
 ひん十一人ひと入牢作れん夫より一人く又五ん  
 少乳くたり一く七月朔日の朝牢金少欠りハタ一  
 造り一船系法を具南京一く世ひ一法を承買上  
 云倣り十一人のもの一紐法の本海名親一ツ下奉行而  
 一草鞋踏道中多量粉海所の為り一く道中出泊乃  
 出泊人一人只不役二人又新く十一人一人一人ツ扶突  
 三人を内附長崎出立作れん一く九月十九日尾張  
 造り一船一れんより夫より千賀志摩殿尾張の船も此よりあり  
又一十賀志摩殿より  
 ありん此をえん漂流乃初の流りを一尋すれば中  
 をひりりの海一人は九百十文で海をえん流新元尾へ

川海されきり

一ハツコ島より長八里の幅二里程の所よりい島まん山  
 一くく島より流本をたえ生ありす  
 一團子を草を色科一ふ敷一くをえりかハ作り  
 又南雲委士か一極ありあり  
 一胃子を女を名一りつても女をこれに喰す多をえり  
 せり此風俗あり  
 一海も日本乃百葉に一と一習をえりそ外在の如く  
 一本小多あり奥に海をくか一ツの舟をくく取猫蠅蚊ハ  
 日おは管れりあり一又麻太蛇の節外虫黙れりあり  
 一い島一ヶ年乃保もありん何月くといふあり一但一

一書をんといはる人の  
婚姻の所へつとをき  
珊瑚海と名づる所がく  
所と

今年の三月より去年の二月までを一年と云ふやうに  
収束は秋冬と四年と云ふやうにわくわくも噴き  
寒やちと云ふ一何と日本乃三月のなほな  
一伊神といふやうにわくわくすれ乃洋月年をわたり  
精をとつたやうに  
一娘取舞入といふやうにわくわくすれ乃  
祝類の中死に乃のやうに昂ひは汗もあせり  
團へ埋れまゝ

一おれは客に招かれし海家のゆゑに  
石は徳をそとてあそびをたたく振れは俗也  
一家のよさをくらひ置れ九人行二回せり之何れと本乃はとひき

一喜まばタンと言ふと凡そ  
左の如し  
家 ヲカヒ 戸 アンチイ  
鍋 フリホク 浅 キトリ  
薪 土カクナ 不淨マニ  
飯 タケハス 竹 ヤワラン  
暑 コロ 主人トウマタ  
下人 カマアツ人 ガイボ  
一代 カイワコム  
客 マルナ 祖父母ハシカチフ  
船 ケナ 子モカナク  
兄弟 カリホラセン 夫婦 カツキ  
伯叔 マコラシ 男 アンマロ

一 一ハタシ島の目一コカコイといふ所家五百軒あり又ウサと  
いふ所家八百軒あり此ニテ所多偏なり 室何なり  
其の具足を見しよは乃はくく 産を極く甲と本と  
ぬき産乃先の中よりして其へ冠りしあり  
一 クトコといふ島ハタシより西里所の海を隔くをこよは  
牛馬りなむ教し生ずれと又ハタシより六十里を隔りし

一 一ハタシ島の目一コカコイといふ所家五百軒あり又ウサと  
いふ所家八百軒あり此ニテ所多偏なり 室何なり  
其の具足を見しよは乃はくく 産を極く甲と本と  
ぬき産乃先の中よりして其へ冠りしあり  
一 クトコといふ島ハタシより西里所の海を隔くをこよは  
牛馬りなむ教し生ずれと又ハタシより六十里を隔りし

女ワリコス 親アマ  
 子息ゴロイ 天家ナ  
 莫モミイ 日コタ  
 齒バク 口ナク  
 耳タケイ 髪リニ  
 手トリサ 日ホカ  
 月ヲラフ 陸並ホウ  
 一アツシニウハミアワト  
 四ノホ五リシニホアツシ  
 七ヒト 八ナホ 九ヒイ  
 ナヲウケ  
 又バツシノ人 國ヲモトメ  
 ナマラレ アラリマウ オカリ  
 ナワコモテ

河上ノテイラニトシ急所ヲ守ルニ  
 又キテ今迄珊瑚虎珀等々  
 携心は島ヲ海ヲ相渡虎珀等々  
 一ハクニ急所ヲ船を出シ東ニ  
 五ノ日ヨリ五ノ日ヨリ  
 ありし山ノ船をかせしあり

本邦乃人唐玉住居物語

唐玉乃人物  
 風月咲淡と云

先年々唐玉乃人ト長崎ニ居住シ日本乃人ト唐玉ニ海  
 自中ヲ取リテトキ東部ノ角倉系ニ系列ノカキ今  
 瓦前乃伊原長崎乃末次板橋船を仕出シ暹羅東埔寨  
 廣南東京の諸島ニ海ヲ高ビシト云云ト云止  
 之待暹羅廣南の地ト云今ヨリ日本所ト云本邦乃人の子孫  
 ありしと云云乃人ト云海海ト割林ト云云行ハル  
 帛帆乃以露ト云船工傳リク唐玉ニ行ハルハ  
 一色ナシト云流ト云船工傳リク唐玉ニ行ハルハ

その八幡と不詳の記が  
 日本の人をふつふと  
 制禁せしむる高ひ船  
 の外に書かぬもの八幡  
 と書し織を船子建福  
 建廣東其外の唐也一船  
 と号稱す又船か又一  
 船の字をあらうれば  
 舟の人はをばし船と  
 舟と船とをわたりと  
 舟とを船とをわたりと  
 舟とを船とをわたりと

同じ止り其地乃人とありしと  
 伊帆とんと坤をりせし唐船へ密買七時と云と八幡と云  
 仲より出され泉州府へ  
 と一人を福少府へ行  
 着板を出し烟草を包む  
 唐玉の人はを蛤子煙と  
 孫ふとも信節三人ふり  
 後一泊し山よりとあり  
 又長崎横津所のもの  
 いじりの唐船へ密買し  
 皆此下流す人質とく

唐より行し其船を張氏元  
 一彼地に住居する張三  
 持唐銀六七十貫目の方  
 されとも本邦を高乃船  
 右の船かしく其帆帆乃  
 油をあらうぬれぬと又  
 酒汲かしくぬれぬと今  
 習ひ具しすれし又林大  
 長崎の七の島人密買す  
 府の沖あり其山の近き  
 船底は湯をせし終に陸



杜泉定とよ唐水の船をわ邦へ渡りてし船よ字を論じ  
 長崎乃渡りし中杉板唐船の王ありて長崎へ揚りし  
 又薩摩乃玉の字物とよもの臺湾へ渡りてしあり  
 坂本居の年と申し、数年以前より浦お府の長樂保  
 あり親法丹とよもの所は勤政し、酒興於女あり  
 駛り法丹とよ味すれしり又長崎乃ものよと名を  
 長を命といひしもの程文端といふ南京の船よの形よ  
 あり船し、難風を過南京の内沙か堤といふ所、是は  
 南京とよの海は碧花あり蘇州府に在しよ本邦  
 にくとを列れしれありは是寒のからし船く積し  
 了流と袴を此於し也本邦の人を運城しり人よ

初しれしはを船を程々城と名をすりありし廣南よ  
 日本所とせられハこの所へをすりしとて流子一也目をえ  
 彼地へ送りきりしは唐水乃風俗とよを蘇州へ  
 立歸住居せしよ又長崎唐人のりのよ唐船の帰帆よ  
 伴れ寧州府の内崇明源と居たりしもの船とありしよ  
 助と名今と山東とよ所へ行て野長野と本名と子新と  
 改りし又何ものやむ東京の内須川といふ所の控し也  
 舟あり七助といふものを密買船の水と雇ひ連れしり  
 是く巧しりとて正浪百貫目又五十貫目と皮幣と  
 石を入り行唐船漕寄百貫目自の船を改りし  
 天皇の程と心えありけれハ其心はよく何價ひ福の事を論

つて船をいひまねて是を海に投げし物を出し船に  
積置物を唐人お茶改めし由し小船のやい細と印密  
買乃船を船と云ふ趣をきりけ何水七助を酒に酔ひ  
飯石を入し改命の事あはれと云ふす寝睡し居る唐  
人を又くお審し思ひ七助を川に投命を改し其時四  
指をいれし悪く石をちり八指を英子工社コラシヤの是れ船を  
渡す趣をきり密買船を逃れし由し隔りちり七人入  
り責むの憤りしし七助を海中に沈めれしは飯石  
取ししを船をこれと云ふ事不道りしし新敷れ埃共さ  
けりし之をい憤りし人衆を載んすも道理し叶す  
り別列の由し七人入しし船に沈りしはすへしとて教日

間帳をいけす沖より来る船しし小船の趣をい  
けりしとて唐國へ連れし一普陀山に船を寄普陀山  
寺に初ま旅一費目をいけし七助を出家とありしと  
いひ入し内飯り不道り也又忽風を吹出され海防し不  
海をい漂ひたりちり八人所の江人たり日本の人を  
云ふ事ありしし船を迷惑し乃ちとて七助を  
あちし海中へ身を投し死しとて

右本邦乃人唐より居住せし物語を享保八年春  
卯年長崎乃所人合をいしし船の密買密賣  
及び唐島の人館内よりいししを以本邦の人へ  
後物を高ひしとてししを書ししとありし書の日

久へ節れと文政五年正月 源氏と云ふ記  
附録一巻終りのあり



